

令和5年度 自己評価書

学校園名 附属国際中等教育学校

1. 学校経営計画

別紙のとおり

2. 自己評価

領域	重点目標・具体的取組	達成状況・成果と課題	評価	今後の改善方策	学校関係者評価を踏まえた今後の改善方策
学校運営	<p>1. SSH3 期目の指定 2. 寄付金当該部資金獲得のための策を講じ実績額増 3. HP 更新回数 年 100 回以上 4. 学校預り金残高 R3 年度末比 -45% 5. 学びの確認アンケート 年 2 回実施</p> <p>◎① IB・SSH・ユネスコスクールとして特色ある教育に取り組み、企画立案・実践・評価・改善をおこなう。社会に開かれた教育課程を実現する。NPO・NGO や教育団体等との外部連携を深め、教育力の充実を図る。SSH については 3 期目 指定 を目指す。</p>	<p>グローバル委員会 課題研究の評価のモデリングを今年度も行ったが、引き続き教員間での共通理解を深める必要がある。 ・国内外の研修や交流の機会を積極的に確保したが、欧米への研修に関しては費用が高騰していた。 ・ Global Café や外部評価会などで、学年を超えて学ぶ機会や、卒業生と在校生をつなぐ機会は設けられたが、今後もより有意義な形でつながりを形成していけるようにしたい。 ・ 目標 4 の追跡調査に関しては、啓泉会との連携を含めて今後も引き続き検討したい。 ・ 目標 5 に関しては、サイエンス委員会と協働して次年度の運営に向けて準備を進めたい。</p> <p>IB委員会 ・ MYP・DPプログラム評価で指摘された課題を研究部や国際教養委員会と協働的な取り組みによりATLスキルの効率化・明示化や、学問的誠実性の体系化を進展させることができた。MYP・DPコーディネーターを中心に他校やIBOとの連携を密にしながら、滞ることなく業務を行うことができた。今後は、一層の協働設計の機会が求められる。</p> <p>国際教養委員会 ・ 「改善課題」に挙げるように改善事項は残されているととも</p>	A	<p>グローバル委員会 ・ 評価の時期や規準の見直しとともに教員の指導力向上を図り、生徒の研究成果が評価されることによって学校全体の研究活動の活性化につなげていく必要がある。 ・ 組織改編に伴う、ISSチャレンジ研究成果発表会などの業務効率化 ・ 海外研修に関しては、費用面を含めて持続可能な研修のあり方を工夫していく。</p> <p>IB委員会 ・ 教師が授業の質を高めていけるように、学校全体で連携を取りながら環境設備を行う。</p> <p>国際教養委員会 ・ 「国際教養講座」について今年度は3つの柱で2巡目の実践が行われ、各学年における「国際教養」の実施の実態を記録に残した。前期課程における「国際教養」の“コア・カリキュラム”が確定しつつあるが、以下に学校全体の取り組みとして全教員が把握・携わっていくかという面でさらなる検討が必要となる。それをベースに後期課程の「国際教養」への連続性などを検討していく必要がある。 ・ 国内ワークキャンプにおけるプログラムの充実が図られているが、国際教養委員会と当該学年との間でその実施目的等に関するギャップも顕在化した。また、国内ワークキャンプIIにおいては、旅行業者の本校ワークキャンプへの理解不足、実務における力量不足が問題となった。 ・ 「課題研究」に関して、その充実を図るために授業時間数の確保を提案したが、模試の実施との関連から十分に</p>	<p>学びが多様化する生徒を育成していくうえで、教員の業務も質および量ともに多岐にわたり増加している。働き方改革を意識し、学校全体の業務量を考慮しながら、よりよい教育ができるよう模索していく。</p> <p>学校評価の回答率を上げるために調査時期やリマインドの回数などを検討する。また、学校での取り組みが生徒及び保護者・生計維持者に十分に伝わるよう情報公開に力点を置</p>

		に、加えて国際教養委員会外部からの動きで委員会としての方針が変更を余儀なくされたり、従前の努力が報われない状況もあると感じている。しかし、年度当初の計画はおおむね実現でき、さらにはそれ以上の実施を何点か実現することができたことは、委員会メンバーの先生方の努力の賜物である。		時間が確保されたとは言えない。「理数探究」との選択必修修化に向けての対応を行っていったが、SSHに関連した新たな対応を迫られ、苦慮することとなった。本当に効果的かどうか、生徒のためになるかどうかという一点で検討を継続していく。 ・「総合的な学習/探究の時間」への他校からの関心は大きい。成果等を積極的に外部に公開するとともに、本校の特徴的な教育の改善を図っていく手立てとし、外部連携の軸としていく。	く。
教育活動	6. DP選択科目の充実 次年度選択科目の新規設置 未達 7. 令和6年度海外WC実施に向けてのプログラム開発と業者選定の実現 達成 8. 評定に関するミス ゼロ 未達 9. 学問的誠実性の事故 ゼロ 達成 10. 推薦入試・海外入試・奨学金出願における重複出願事故 ゼロ 達成 11. いじめ重大事態ゼロ 貴重品盗難ゼロ 未達			IB委員会 ・IB教育モデル校を目指す学校経営計画の重点目標達成のためにMYP・DPに関する協働設計の機会を他の分掌や委員会と連携を取りながら時間を確保する（IDU授業の充実やPPフェア開催も含める）。	個別最適な学びを実現するための方策を検討し、生徒一人ひとりに適した指導を行う。生徒及び保護者・生計維持者との良好な関係を築くための方策を検討する。 。発展する生成AIとの学習者としての付き合い方、教育者としての付き合い方を模索する。
	◎⑳ IB プログラム評価で指摘された要検討項目を改善する。大学のリーダーシップのもと、DPの要改善項目解決に向けて、選択科目の充実への方策を検討し、その実現を図る。	IB委員会 ・DP生が増加したこともふまえ、理系に対応したDP科目増について、学校の体制と需要とのバランスをふまえてその可能性を探りドラフトを作成した。	C		
研究活動	12. 外部機関等との共同研究・受給研究 3研究以上 達成			研究部 ・公開研究会実施に向けて、校内研の充実と、研究グループの活動の促進 ・SSH事業における、研究部の役割の明確化と、分掌として研究開発事業に取り組む ・研究成果の発信 ・現代的な教育課題への対応 サイエンス委員会 ・来年度についてはSSH事業に関わる業務の担当が大きく変更される。全校体制でSSH事業に取り組み、文理融合的な取組を推進するためにも、これまで以上に各分掌間の意思疎通や連携の方法の工夫が必要である。 ・本校の課題研究の枠組みとなる部門分けやそれに応じた評価方法について、急ぎ検討し、数年をかけて検討・改善が必要である。 IB委員会 ・教師が授業の質を高めていけるように、学校全体で連	今後も様々な分野における研究を継続していくとともに、研究成果を公教育に還元する努力をしていく。特に生成AIの利用に関する方策を検討する。
	◎㉔ IB・SSHに全教員が積極的に取り組むとともに、校内研修会や教科会の内容を充実させ、教科横断的分野（を活発にする。外部資金を獲得しての共同研究を促進する。	研究部 ・7月と12月の校内研を減らしたことに対する対応が不十分だった。HP更新が不十分となり、研究成果の発信が不十分となってしまった。 ・研究グループで協議する時間が減ったため、授業研究会に関係した取り組みにおける授業者の負担が過度に増大した。 ・SSH事業における研究部の役割が不明瞭となっており、分掌としてSSH事業に取り組むことが出来なかった。 ・現代的な教育課題に対する研修を十分に企画できなかった。 サイエンス委員会 ・第2期最終年度として、SS科目、SSIB講座、理数探究活動、ISSチャレンジ、スタディツアーの実施と評価を行った。授業研究会ではSS科目の授業公開、SSH情報交換会を行った。卒業生の人材活用についても新規の講座を実施した。HPの内容	A		

		<p>を充実させSSHのfacebookページを立ち上げた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>第3期申請について、新規に設定された文理融合枠での申請を行った。それに伴って、校内の課題研究の枠組みの統合・再編を行い、目標や評価規準についても検討した。申請書類の準備については校内で議論する時間を十分に取れなかった。</li> </ul> <p>IB委員会</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学習・指導の様々な場面におけるATLが活用されるように校内研修会で毎回明示しグループ活動も行った。</li> </ul>		携を取りながら環境設備を行う。	
学生の教育・支援活動	<p>◎③⑨ 授業参観や教職大学院 IB 研修 や教職専門 実習生 を積極的に受け入れる。大学で新規に開設された 授業科目「自己創造のための教育体験活動」学生ボランティア派遣に協力する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>現職教員、東京学芸大学を含み諸大学の学生を多数受け入れた。</li> <li>大学での開設科目「自己創造のための教育体験活動」学生ボランティア派遣に複数回協力を要請したが、実現には至らなかった。</li> </ul> <p>研究部</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学生の教育実習や研究に対して、現状を踏まえた適切な支援を行う。補充実習を含め、滞りなく教育実習を実施した。</li> </ul>	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>引き続き授業参観や教職大学院 IB 研修 や教職専門 実習生 を積極的に受け入れる。</li> <li>引き続き大学で新規に開設された 授業科目「自己創造のための教育体験活動」学生ボランティア派遣に協力する。</li> </ul>	今後とも学生の教育や支援を十分にできる環境を整備していく。特別な配慮が必要な学生に対しては特に配慮する。
社会貢献活動	<p>◎④③ IB 校として、また現職教員研修の場として学校見学や研修のための学校訪問を積極的に受け入れ、必要な情報提供をおこなう。大学・政府自治体等公的機関から申し入れのあった授業研究を中心とした研修会を、校務に支障をきたさない範囲で実施協力する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>700件以上の学校視察のうち、IBに関する研修は460件程度となった。必要な研修や協議、情報提供を行った。</li> <li>国立教育政策研究所、東京学芸大学から申し入れがあった研究や研修、授業研究などを実施協力した。</li> </ul>	A	引き続き視察の受け入れ、大学、政府自治体等公的機関からの視察や研究、研修を積極的に受け入れる。	地域との連携について行っている取り組みについての情報公開を積極的に行っていく。地域における先導的な教育モデルの開発を行い、校外コミュニティに貢献していく。

3. その他特記事項 特になし

4. 自己評価委員会委員、開催日

校長 荻野 勉

副校長 雨宮 真一

後藤 貴裕

主幹教諭・進路指導部主任 杉本 紀子

主幹教諭・研究部主任 菅原 幹雄

総務部主任 河野 真也

教務部主任 新井 健使

生活指導部主事 高橋 広明

開催日：令和6年3月13日